

台湾でのマンガ：整体史の観点から

陳仲偉

(台湾逢甲大學教養学部客員准教授)

摘要

本論文では整体史の観点から、台湾漫画の政治、経済、文化や社会など様々な面での発展を探究することを試みる。マンガはテキストならびに文化として、世界中の色々なところで支持され、発展してきた。と同時に、マンガのグローバリゼーションとローカライゼーションはマンガを発展させたいと考える国家と作者が注意すべき問題である。ローカライゼーションの観点からすると、マンガは当地の生活、政治と文化など、多様な面を反映している。グローバリゼーションの観点からすると、マンガは文化交流と対話の一種とも言える。本論文はマンガと台湾社会との様々な関係を整理しつつ、マンガが台湾での政治的、経済的な葛藤を検討し、文化と表現での歴史と制限を探ることで、台湾漫画が発展する可能性を見つけ出す。

キーワード：台湾漫画、マンガ文化、制限と可能

1. 問題の所在

ローカルなマンガの発展を探究するには、そのマンガの起源、重要で代表的な作者、作品とその特徴は何かといった問題に目を向ける必要がある。台湾漫画を認識するには、以上の問題はすでにこれまでの台湾漫画に関する論述に答えがあった。しかし、次の二つの重要な問題が背景 (background) 置かれがちで、ステージで重要な前景 (foreground) に立つことは滅多にない。ひとつは、台湾社会はいかにマンガに接しているのか。もうひとつは、台湾での漫画が「台湾漫画」と言われるようになったときから、台湾漫画は日本、中国のマンガ作品に大きく影響されていたが、その影響されている方式と深さが違うということだ。日本と中国マンガから台湾漫画への影響は、その重要性に見合う関心を持たれないまま、単に一言で解釈され、あるいは、政治と民族主義の影響でその重要性を排除された。

マンガの誕生には、作者、個人の考えと図画の風格が関わっている。その点については様々なマンガ評論と研究で長く注目されていた。しかし、作者に関する以外、社会文化全体のマンガへの重要な関わりと交流については、多くの人はそれを知っていて、論じないとしていた。あるいは、大雑把に整理した。漫画はただの図画やテキストではない。社会の中の一つの文化なのだ。換言すれば、マンガは単に一人の天才的な作者によって成功するのではない、その特異な天才についていく人々がいるから、マンガ創作のブームがはじめて成り立つ。つまり、必要なのは、単に漫画を描きたい人たちだけではない。その人たちによって描かれた漫画を見たがる読者も大勢いなければいけないのだ。さらに言うと、マンガの成功に必要なのは、マンガを創作する人たちとマンガを見る人たちだけではない、マンガ自体の発展、製作と意義に向き合うこと以外に、マンガと読者や社会環境の間の相互作用にも関心を持つべきだ。

2. 初期台湾漫画

(1) 初代台湾地元漫画家

台湾漫画の歴史はそれほど長くはない。主に1945年から発展したといわれる。だが、1945年以前の

台湾漫画はすでに日本に影響されている。1945年以降にはこの状況ははっきりと見えてきた。

洪徳麟（1998、1999、2000、2003）は、台湾の初代漫画家は日本マンガを読む幼年時代を持っていると指摘した。それに、当時の台湾漫画作者は日本の雑誌舞台に出演していた。例えば、陳光熙は1925年の《KING》創刊誌から応募の獎金二十円を貰えた。1930年代には子供漫画が日本から流行ってきた。陳定國、王朝基、陳光熙、洪晁明、許丙丁などの台湾漫画家はその流れに身を任せて、当時の日本の流行マンガに影響されたのも当然のことだ。当時、百人を越えた青少年が日本の「新漫画派集団」が主催した通信教育に参加した。陳光熙と陳家鵬などの台湾漫画史に重要な影響力を持つ漫画家もその授業のメンバーに含まれていた。葉宏甲は日本で川流美術学校に通っていた。陳定國は日本東京太平洋美術学校に通い、日本漫画のテクニックと考えの真髄を吸収した。だが、これらの台湾漫画家は台湾地元への意識が強いため、彼らの作品には地元の色が溢れていた。

1945年第二次世界大戦終了。日本から台湾への殖民統治も終了した。1945年11月15日に、新高漫畫集團と黄金穗、鄭世璠などの協力で、台湾光復後にはじめての総合雑誌《新新》が創刊された。《新新》に載っている時論漫画には、当時の戦後台湾社会の混乱、貧富さ、物価の高まりや政府と企業との共謀などの問題を反映されていた。これは当時の台湾漫画と台湾歴史の重要な証拠となった。だが、経費と当時の資源不足、環境の悪さや政治からの圧力などの原因で、1947年に1月号が出版して後、休刊した。（李闡 1998、洪徳麟 2003）

戦後初めての民間の、そして、漫画を載せた《新新》雑誌は台湾漫画にどんな影響をもたらしたのか？《新新》で載っていたマンガはマンガテキストや、表現の形式と内容から見ると、何れにせよ、どれも西洋の風刺画と評論マンガのタイプに近いと見える。《新新》の後に、強烈な政治風刺性を持つ漫画が、中には新聞紙に載せている漫画が代表として、主流漫画の一つとなった。それに、国民党政府は中国大陸出身の漫画家を連れてきたから、なおさらだ。李闡（1997）は1949年国民政府が台湾に移動したあと、南京《中央日報》が台北で復刊されたと強調した。《中央日報》、《新生報》、《中華日報》と《青年戰士報》などの新聞紙が漫画発展の根拠地となった。当時の政治漫画のテーマはほぼ「反共抗俄」（共産党とロシアを対抗/転覆する）が大目標となっていた。

一方、この時期に、新聞に載せられていた政治漫画は、文化の発展が政治に影響されていることを反映している点に注目すべきだ。つまり、国民政府が来てから成り立った政治漫画のことだ。台湾初期の政治漫画は中国政治漫画と抗戦漫画の伝統を受け継いだ。そのため、西洋の風刺画と創作の本質で大きく違いがあって、逆方向に向かっているとも言えるだろう。西洋の政治風刺画は政治への不満から生み出したものだといわれる。が、当時台湾の政治漫画の大部分は政治に操られ、政治に主導権を握られた。

（2）漫画週刊誌と子供漫画の出現と流行

しかし、初期の台湾漫画は新聞紙と雑誌の政治風刺漫画だけではない。洪徳麟（1999）は、当初の台湾漫画の種類は主に二つの種類の分けられると指摘した。中国大陸から来た漫画家は評論的な風刺漫画とユーモア漫画を中心に、台湾地元漫画家は子供漫画と挿絵を描いている人が多いのだ。

台湾地元漫画家と、政治漫画を中心にして大陸から台湾に来た漫画家との方向性は大きく外れいる。台湾漫画家は主に子供漫画という領域で発展していた。

1953年当時、台湾には257種類の雑誌があり、その中の三分の一には漫画は載っていた（楊孟瑜 1988）。それらの漫画の大部分は子供漫画だった。1953年の《學友》の発行は子供漫画の重要な基礎となった。これによって、雑誌に漫画を載せる漫画ブームを持ち出した¹。その後、漫画専門誌が出現し

¹ 当時の雑誌《學友》の売り上げは毎期二万冊以上に上がっていた。（辛廣偉，2000：192）

はじめ、1958年には、台湾の漫画雑誌が20種類を超えた。

50年代末に様々な漫画雑誌により起こった漫画ブームを引き継ぎ1960年代に漫画の好況で次々とデビューした新人がもはや、当時の漫画雑誌には受け入れられないため、はじめての漫画形式「単行本」が現れた。洪徳麟(1998、1999、2003)によれば、当時に、漫画出版社が次々と開業した。たとえば、母忘在莒、新臺、志成、太子、宏甲、藝昇、集英、義明、文昌、南昌などの出版社が出版戦争に加わった。その時にデビューした新人はほとんど十四、十五才で、十六、十七才に出世した。それに憧れ、大勢の人が漫画業界に没頭した。大部分の人は日本漫画を描くことから始めた。小学校卒業してから、弟子になった人や、中学校も卒業してないにも関わらず業界に踏み込んでいく人もいた。漫画家を目指す多くの新人が漫画家の事務所に寄り集まった。たとえば、当時の葉宏甲の所には二十人以上、陳海虹にの所にも四名が弟子入りしていた。他にも洪義男、涙秋、傑祥、范藝南、蔡志昌、許松山、王朝基、許華良など様々な漫画家が奇想天外な武俠、文芸漫画を共演した。

だが、こうしたいい景気は長く続かなかった。このような子供を代償としての漫画は、早速政府に審査された。

3. <編印連環圖書輔導辦法>と海賊版日本漫画

(一) <編印連環圖書輔導辦法>、その背後の論理

台湾漫画の発展をめぐる論考の大部分は、いずれも1966年に実施された<編印連環圖書輔導辦法>が1945年から60年代までの台湾漫画の発展を阻止したと指摘している。そのため、台湾漫画の漫画創作の欠落は二十年も続いた。それが、今の台湾漫画と日本マンガが競争できない主因と見られる。台湾の漫画界は<編印連環圖書輔導辦法>を「漫畫審査制度」(漫画審査制度)と呼んだ。ここには漫画界がこの制度に対しての態度を表れており、この制度の運用とその影響を示している²。

1962年9月27日、台湾の行政院第七八三次会議で<編印連環圖書輔導辦法>が通過した。その年の11月6、7日に内政部と教育部から公表され、実施された。審査を担当するのは教育部「國立編譯館」だった。本当に実施されたのは1966年、教育部が執行した。1967年にこの業務はまるごと「國立編譯館」に移管された。その後、審査のために、<國立編譯館連環圖書編印及送審注意事項>、<國立編譯館審査連環圖書補充注意事項>、<審査執照發給辦法>、そして<國立編譯館連環圖書送審程序>と<編印及審査連環圖書參考資料>が追加され、漫画の内容、絵の表現、言葉扱い、テーマ、印刷と編集などを規定した。

漫画審査制度の台湾漫画への影響を論じたものを全般的に見ると、その論旨にはいくつかの共通点が見られる。

- 一、<編印連環圖書輔導辦法>の大部分は規定自体に問題点がある。
- 二、<編印連環圖書輔導辦法>は、漫画創作を殺して、台湾漫画創作の欠落をもたらした。
- 三、<編印連環圖書輔導辦法>から逃れるため、出版社は日本マンガを取り入れた。その時から、日本マンガは台湾の漫画界における主導権を握った。今になってもそうだ。

前述のいくつかのポイント以外に、本論文は漫画審査制度の背後には、そのもっと深層に、長きわたる文化構造があると指摘したい。この構造こそ漫画審査制度を作った主因で、今も台湾漫画最大の挑戦なのだ。

² 現在の台湾漫画に関する論述と研究から見ると、日本マンガから台湾読者への「文化侵略」を心配するものがよく見られる。その心配の背後には、一つ重要な背景がある。それは「審査制度」である。だが、全体的な観点から台湾漫画の発展、台湾漫画と日本マンガの葛藤を見る人は今も少ないほうだ。いまは洪徳麟(1999;2003)と陳仲偉(2006)、二人が台湾漫画史の論述をしているが、台湾漫画の分析の経絡には、二人は大きく外れていた。洪徳麟が重視するのは「台湾人が書く漫画」であって、そこから台湾漫画の行くべき道を見つけ出そうとしている。陳仲偉は「台湾での漫画」に着目した。漫画はいかに社会と交流するのか、漫画作者と読者はいかに社会と対話するのかということが重要だとした。

まず、離れて、遠くから全体の状況を見てみよう。実際に、漫画は台湾政府に全般的に拒否されたわけではない。50年代と60年代に、政府と軍隊は様々な漫画コンテストと展覧会を開催した。1950年に、軍隊の中には漫画の部門があって、50年代「政工幹部學校」（当時の政府が戦争の準備のため設立した学校。）にはもう漫画課程が設立した。漫画が文芸から排除されているのは事実だが、漫画界の中でも政治風刺漫画だけは、政府に認められた。当時の戒厳令と白い恐怖の台湾社会の雰囲気 considering してみれば、漫画審査制度の問題は「もしも存在しなかったら」というようなものではない。漫画審査制度は出来るべくしてできたものだ。しかもこの問題は今も違う形式で続いている（つまり漫画のレイティング問題だ）。

当時、審査された漫画は、政府が直接的に制御しづらい、子供読者をメインに市場に流通した「連環圖畫」だ。〈編印連環圖畫輔導辦法〉で、「本制度が指す連続絵は新聞紙、雑誌と各種の教科書以外の各種文字と絵でストーリーをつなぐ本である」、「政府は事実に応じて、連続絵への指導を強め、少年と子供の心身の健康と他の不良影響を防ぐため、この方法を公表した」³。政府が主導した政治漫画はこの審査制度に含まれていなかった。⁴

50年代に築き上げられた台湾漫画の二つルート：政治に影響された風刺画と子供漫画。この二つのルートをあわせたら、まさに当時の政府と社会の主流な考えだ。漫画は抑圧されていた。漫画の読者は子供だったので、なおさら抑圧と補修が必要だ。

これこそが本論文で指摘しておきたい台湾の漫画を長きにわたって支配してきた文化構造である：つまり「政治風刺漫画は政治のイデオロギーで主導され、政治に触れにくい子供漫画は、禁止と指導で、二つの方法で管理してきた」のである

このような考えで、台湾の漫画文化が発展するための重要な基礎は狭くなった。つまり、漫画行動者だ。かつては、漫画の行動者というと、一番注目されたのは漫画作者のだ。これまでの漫画審査制度に関しての議論では、漫画家が審査制度への不満と遣る方ない気持ちについて言及しないものはいなかった。しかし、それ以外の漫画文化の行動者、つまり読者の方はほとんど触れられなかった。漫画審査制度が起こした漫画行動者の無力化はたんに作者が漫画を作れないだけではない。審査制度を作り出した人はただ自分の勝手に漫画読者（つまり子供）のために、完璧に見えるが、本当は幻で変な世界を作り出しただけだ。読者の声は漫画審査制度が出現して以来、今になっても、重視されていなかった。今もただ審査するのが主流から指導するのが主流に変わっただけだ。

（2）台湾は「海賊版王国」となり、漫画論争に巡り合い

1966年から実施された漫画審査制度は台湾の70年代の連続漫画の創作をほとんど無にした。だが、李闡（1998：123-126）の《漫畫美學》では、1970年代の台湾漫画の発展について、別の観点があった。李闡は70年代に開かれた大型漫画展覧会と中華民国漫画学会の成立を取り上げた。そして、政治漫画が盛り上がっていることも指摘した。実際には、台湾漫画70年代の衰弱と先ほど触れた漫画イベントの発展の間に矛盾はない。前に分析した台湾漫画の主な発展方向を振り返ってみれば、分かるだろう。

ただし、市場から言うと、確かに漫画審査制度が、1970年代の初期の台湾の漫画市場を潰したともいえるのだ。1975年、国立編譯館の管理者は漫画創作の衰退を見て、日本マンガの審査を開放した。文昌出版社が創刊し、日本マンガを主にした《週刊漫畫大王》（この雑誌の台湾漫画はただ錢夢龍の《西

³ これは〈編印連環圖畫輔導辦法〉の第一条と第二条である。（「總統府公報 第一三八三號」から引用）以下に、新聞と政府の公報を引用する部分は注釈を参照。特に引用を表記してない部分と資料は陳仲偉（2008）から引用。

⁴ 1948年5月国民政府はまた台湾に来てないときに、教育部と内政部は〈編印連環圖畫輔導辦法〉を公表した。この時期での連続図画は「字と絵を使い、ストーリーを繋ぐ本をさしていた。」政治風刺画も同じく含まれていなかった（教育部内政部公函 禮字第〇九〇二號から引用）。

遊記》だけ)が台湾の漫画市場を蘇った。審査範囲を開放したら、日本マンガを専門した出版社が次々と現れた(正確に言うと、日本マンガの海賊版を出版する会社だが)。大手会社は東立、虹光、伊士曼、華仁、遠大、志明、藍宏、力群など数十社にもあった。

行政院新聞局に行政命令で輸入を禁じられていた日本マンガが、行政院教育部に所属した國立編譯館に審査され、しかも通過し、「審定執照」を発行した⁵。一方で、台湾漫画の創作が審査される時は嫌がらせじみたことが数多く行われ、多くの漫画家が不満を抱えた。(洪徳麟, 1999)

台湾初期の漫画家(特に80年代前に漫画家になった人)で日本マンガについて話し出して、怒りださないものはいない。彼らはこれをまさに日本マンガの「文化侵略」と見なした。しかも、日本マンガにはエロと暴力があふれていたと強調した。日本から来た外来漫画は徹底的に消滅するべきだと。1980年代のはじめに牛哥によって「漫畫清潔運動」を行われ、日本マンガへの正式な宣戦布告がなされた。メディアに対しても、「子供に対して漫画は『毒』である」と「日本文化侵略」の観点で、数年にわたる漫画論争がはじまった。

その後、日本マンガのエロは各種のメディアで話題となった。1980年から1982年の間は特に激しかった(洪徳麟, 1999)。当時は漫画家だけではなく、児童文学界も日本マンガを抵抗し、日本マンガに「制限」すべき、国内の漫画家に市場を保留すべきという呼び声もあった。

では、私達はどうやって、この混乱にあふれて、規定と論述が中心を失いやすい時期を見ればよいのか。蕭湘文(2000)は、漫画審査制度が制限したのは地元漫画家の創作である。審査委員の漫画での専業に対する疑いと審査過程で浪費される時間と複雑さ、といった問題があるため、漫画出版業は市場に対応できず、ローコストで、翻訳的な方法として、日本マンガを取り上げられた。そのため、地元漫画家の創作は衰えたところか、市場には低俗で雑な漫画があふれた。海賊版であるため、その質に期待できないのだ。だが、当時は娯楽の情報と媒介があまりないため、読者は漫画への要求はそれほど高くなかったのだ。牛哥などの漫画家は、「漫畫清潔運動」を通じて、市場にある日本マンガの中のエロと暴力への不満と心配を表明して、メディアと教育当局の関心と呼び寄せたのだが、海賊版漫画を防ぐには、政府は手も足も出ない状況だった。そのため、日本マンガの市場での流行には中断はなかった。全体からいうと、この時期から読み取れる社会的意義は三つある。一、公権力より市場のほうが有力である。二、メディアで、社会から漫画への負の印象が深まった。三、日本マンガ創作のスタイルの普及。

4. 台湾漫画の再起と再墜落

(1) 80年代漫画コンテストと雑誌の影響

1983年1月、敖幼祥が《中國時報》に載せた《烏龍院》は多くのサラリーマンが出勤する前の朝ごはんになった。そのため、多くの人は漫画を読む習慣を身に付けた。《烏龍院》の流行は話題になって、《烏龍院》の周辺は次々と登場し、テレビと映画もあった。その程度は1950年代の武侠漫画「四郎真平」ブームと互角できるぐらいだった。だが、わずか二年で、その流行はおさまった。しかし《烏龍院》がもたらした創作ブームは続き、多くの新人が漫画コンテストからデビューした。朱徳庸、蕭言中、孫家裕、柏言、老瓊、蔡志忠、王平などの漫画家が、台湾新聞紙のユーモア漫画を盛り上げていた(洪徳麟, 1999)。

80年代、台湾漫画が流行したキーポイントは漫画コンテストにある。一番重要なコンテストは1984年に中華民國漫画学会、中国時報系、世華銀行文化慈善基金會と中華電視台が共に開催した「七十三年全國漫畫大擂台」と1986年に中国時報系、中視、統一企業、永崎百貨が開催した「全國漫畫大擂台」

⁵ 台湾政府は1973年から日本文化と商品の受け入れを禁止にし、日本語を話すのも禁じられていた。1994年になってから日本の商品の取り入れを開放した。

であった。二つのコンテストには前者が1802件、後者が800以上の投稿を受けた。コンテストにはひとコマ、コーナー（4コマ）と連続漫画三つの種類に分けられている。二つのコンテストで賞をもらった参加者はその後、重要な台湾漫画の作者となった。このブームで、新聞紙は漫画コーナーや漫画雑誌を設立した（李闡，1998、洪徳麟，2003）。

1985年に登場した《歡樂漫畫》はユーモア漫画、ストーリー漫画、そして漫画に関する情報の三つを載せていた。ここに漫画を載せていた漫画家は阿推、鄭問、廖文彬、蔡志忠、魚夫、朱徳庸がいた。これらの人もその後台湾の重要な漫画家となった。その中の、鄭問と蔡志忠は海外進出も果たした。1989年に《星期漫畫》は鄭問、麥仁杰、曾正忠、陳弘耀、任正華、林政徳などの漫画家と取り入れ、ストーリー漫画をメインにした。その中の多くの作品が単行本を出した。《星期漫畫》は1991年に停刊したが、その時に積み上げた基礎は多くの漫画家の海外進出の助けとなった。

館林見晴（2005a、2005b、2005c、2005d）はこれらの新しい形式のコンテスト、つまり漫画新人賞による台湾漫画スタイルの発展を見届けた。台湾の漫画新人賞は主にある主催者が大型コンテストを開催して、実力のある新人を探すために開かれるものだ。そして、雑誌がそれらの新人を使って創刊されたり、あるいは、既存の雑誌にそのまま漫画を載せられたりした。他にも《小咪漫畫周刊》のように、雑誌で漫画授業、毎号に4ページから6ページの読者投稿と質問コーナーがあった。台湾でも早い時期の、しかも系統的な漫画人材の培養活動ともいえるだろう。小咪漫画賞は五回開かれた。その後に台湾の重要な漫画作者がたくさん参加した。1984年と1986年に開かれた全國漫畫大擂台は当時最も賞金額が高いコンテストであった。全國漫畫大擂台の審査基準は「娯楽性」と「商業性」よりも、「芸術性」と「表現形式」が遥かに重要なのだ。これは当時の世論による漫画への批判の影響かもしれない。

「育てる新人」を探すよりも、「全國漫畫大擂台」が求めるのは、すぐに出場できる「即戦力」だ。しかも発行量何万以上の雑誌で戦える強い戦力だ。強力な新人の発掘は、80年代中期の台湾漫画出版界を活気づけたけれども、逆に賞金が減り始めて、「育つこと」にも力入れていないため、激しい衰弱が始まった。新聞紙と雑誌との供給が減って、漫画専門誌だけ残った。そして、「全國漫畫大擂台」が終わった途端、《歡樂》、《星期》も停刊した。

1987年7月15日に、1949年から38年も続いた戒厳時期が終わった。1987年12月4日、＜編印連環圖書輔導辦法＞も取り除かれた（だが、漫画を審査や指導する考えは消えなかった）。当時の経済発展で、国民所得は10000ドルに近い。と同時に、政治開放と社会の多元化によって、出版界の出版品の内容から、形式と全体的な出版市場は大きく変わった。

（2）漫画版權と短いブーム

1992年6月、新しい著作権法が実施され、1993年5月にはアメリカにより台湾を特別301条約の優先リストに載せられことで、台湾漫画市場は最初から組み立て直された。1992年から東立、大然、尖端、長鴻、青文などの出版社は次々と日本の漫画出版社と契約し、漫画雑誌を創刊した。一番多い時期には30種類もあった。東立出版社も台湾漫画だけ載せた漫画雑誌《龍少年》、《星少女》を発行した。大然の《公主》も台湾の創作をメインとした。東立の《寶島少年》、《新少年快報》と大然の《熱門少年》にも、台湾漫画作品を載せられていた。

90年代初期に、多くの台湾漫画家が海外での活躍を果たした。鄭問の墨絵漫画は「日本漫畫家協會漫畫賞」の優秀賞を受賞し、「亞洲至寶」と呼ばれた。曾正忠は「筆的魔術師」とよばれ、高永、度魯は日本で作品を連載した。林政徳、練任、洪正輝、張裕群も日本の雑誌で作品を発表した。阿推と麥仁杰はフランスで作品を発表した。

90年代の初めに、漫画産業が版權化したため、漫画産業にある経済利益ははっきりと見えるようになった。多くのメディアや人々が漫画の影響力は単に子供と青少年にあるだけではないと主張するよう

になった。漫画には全国運動なるポテンシャルを持つと。だが、これも90年代中期以後の漫画論争再燃の種になった。なぜなら、この時の台湾社会、マスメディアは、漫画と漫画読者を深く理解せずに、ただ経済利益を見ている一方だったからだ。

当然、漫画文化の発展にとっては、こうした観られ方は漫画を「毒」と見なされることよりもよほどましだった。しかし、「漫画はいい商売になる」という点にだけ目を向けていたら、新しい問題に見えるが、実際は同じ問題が再び起こっただろう。

90年代初期からの台湾漫画のブームは、版權化したからだけではない、あるいは台湾漫画家の努力だけでもないのだ。多くの人が理解していないのは、日本が当時、漫画の版權について述べる際の要求の持つ意義だ。つまり、「提携誌」である。版權を得るには、雑誌の中に台湾漫画を載せることが当時の日本出版社の要求だった。つまり、日本マンガと台湾漫画とが「提携」するのだ。そのため、元々は日本マンガを翻訳して出版したいだけの出版社もやむを得ずに台湾漫画家を募集した。

だが、このように計画性のない募集では、ただ、一時的に質の良し悪しに大きなバラつきのある漫画家が大量に生み出ただけだった。これはいいことではない。これは単に「提携誌」だけが原因ではない。90年代に開かれる各種漫画コンテストにも関係がある。

東立、大然、尖端、長鴻、青文など大部分の台湾出版社が漫画新人賞を設立した。だが、東立以外のほとんどの漫画新人賞は長持ちしていない。受賞した人も必ずしもデビューするチャンスをもたらさるわけではない。

館林見晴(2005a、2005e、2005f、2005g、2005h)によれば、90年代のはじめから中期までは、新人賞をもらった新人漫画家は次々とデビューするチャンスや、連載するチャンスを貰えたという。中でも、東立出版社は新人賞を引き続き開催する以外に、事務所を借りて、東立に属する漫画家が事務所で原稿を描けるようにした。しかも、基本給制度を取り入れた。しかし、97年以後の漫画市場の不振で、各出版社の新人賞の開催にも影響が及んだ。新人賞の開催に加わった長鴻と青文は、一回開催してだけで、後は続かなかった⁶。継続して新人賞を開催していた東立も奨金の金額を下げた。新人賞も積極的に人材を求め、所属漫画家を育てる形式から、象徴的な活動となった。一方、大然が開催した新人賞シリーズはシステム的なことと良い結果が欠落した。特に「編集者(出版社)がひどく新人賞に介入すること」。「商業」を内容に対しての形容詞をばら撒くこと。すべては「商業」だということ。だが、そうした漫画はただ外見だけで、内容は空っぽで、深みもなく、低レベルに日本マンガを模倣することにとどまっている。あるいは、単に読者に媚びを売るだけだ。漫画が本当に必要としている「面白さ」は無視された。そのため、台湾漫画は「模倣しかできない。コピーばかり。内容なんてない」など、読者に思わせてしまった。

1998年、漫画市場の混乱は続いた。長きにわたっていた漫画へのバイアス「サブカルチャー」、「エロ」と「暴力」についての問題が解決しないまま、海賊版が生き返ったのだ。出版社はそれぞれ経営策略にちがいがあがるが、共通してる問題として、専門の編集者、原作者と専門の評論者は足りないままである点が挙げられる。そして、レンタル漫画、海賊版との平行輸入に市場価値を奪われていた。地元の創作作品は国際観と多様性や創意が足りない。漫画教育と漫画を広める計画は確立していない。漫画出版同業協進会は機能していない(蘇清霖:1999)。

20世紀の最後の年に、ほとんどの台湾漫画出版社は30%以上も売上を下げた。93年と95年のピークに比べてみると、印刷量には、95年が漫画出版品の平均印刷量は5000冊以上であるのに対し、99年になると市場にある作品の多くは2000冊を印刷しても、五割も売れていなかった。

台湾漫画の失脚問題については、多数の人は産業や、出版社と創作者しか見てない。社会から漫画へ

⁶ 青文は2005年に第二回の漫画新人賞を開催した。

の影響は極度に単純化された。読者の考えを探究する人も減多にない。

既存の台湾における漫画論は常に読者の重要性を無視しており、そのポイントを漫画家と出版社に置いている。一方、読者、ファンカルチャーについて論じる時には日本マンガと哈日族（日本マニア、日本のことに没頭した人たち）と繋げて語られる。あるいは漫画と、教育問題や分級制度とが繋げて論じられやすい。

（3）漫画教育論、分級論の出現

90年代は漫画審査制度のない時代だ。漫画版權化と台湾漫画創作が盛り上がった時期だった。だが、その時は本当に開放的で多元性に向かっている時代だったのか。そうかもしれない、少なくとも「漫画有害論」は唯一で最優先の選択ではなくなった。が、新たに出てきたのは「漫画教育論」と「漫画分級論」だ。

1995年、政府の要求で、漫画出版業は「青少年にふさわしくない出版品は出版しない」と約束した。1997年9月、中華民國圖書出版事業協會と台北市出版商同業公會は「中華民國圖書評議委員會」を共に設立した。1999年1月、エロ出版に関する法律は刑法第235条「散佈販賣猥褻文書圖畫罪」（猥褻本と絵を販売、ばら撒く罪）になり、犯罪者は「妨害風化」（社会風俗を違反する）という重罪として起訴されることになった。一方、青少年の心理の健康のため、エロや暴力から防ごうと、映画とテレビのレーティング以外にも、新聞局は「圖書分級制度」（図書レーティング）が制定された（Sulpia, 2001: 227-229）。

当時起こった、漫画分級制度の設立の呼び声も90年代中期以後漫画への主流意見の一つとなった。

5. 漫画の整体史視野

（1）漫画は政治として、あるいは経済として

2002年、行政院は「發展文化創意産業」（文化創意産業を發展すること）を「挑戰2008：國家發展重點計畫」の核心項目にした。漫画産業の名も、その中にあった。

幸か不幸か。漫画は確かに政府に目を向けられていた。だが、それは「漫画はいい商売になれる」ということだけを目当てにしたものだった。2001年、行政院新聞局の支持と補助で、中華圖書出版事業發展基金會と台北市漫畫従業人員職業工會は続々と「台灣漫畫季」シリーズを開催し、「漫畫金像獎」コンテストも開催した。

2003年漫画は正式に文化創業産業發展計畫の中の「發展圖文出版産業」に取り入れられた。そこには「政府の援助を得て『劇情漫畫獎』イベントを開催し、アニメ業者とゲーム業者に採用を勧める。漫画業者と漫画団体の地元漫画定期誌の発行に奨金を与える」と記されていた。だが、劇情漫畫獎は効果があまりないため、奨金は減る一方だ（総奨金は500万元から360万元、235万元、2009年を最後に開催を停止）。漫画定期誌が何度も政府の補助をもらえなかったら、すぐに停刊していた状況があり（たとえば《GO漫畫創意誌》、《BINGO樂透漫畫月刊》など）、あるいは、補助金をもらってさえ、出版できなかったこともあった（如《辦公室・亂畫》）。

台湾漫画の發展を見ると、政治力が漫画に資源を注ぐことは1949年国民政府が台湾に来てからもう始まっていた。だが、政治（反共）漫画は「ストーリー」ではなく、「生活」と「文化」でもなく、「武器」として働かされた。政府も大量の漫画コンテスト開催したが、あまり効果は残らなかった。

嘆かわしいことに、政府が漫画産業を補助し始めた数年後に、漫画分級制度が強く押され、漫画論争が再び巻き起こった。

2001年、台北市政府新聞処は「漫畫出版品租售管理自治條例草案」を作り出した。違反したものは罰金三万元以上、十万元以下を課す。台湾高等法院の刑事判決によると、漫画は制限級（R18指定）にレ

イティングされていても、社会風習を逸脱すべきではないとされた。これに従わなければ「公然陳列猥褻文字、圖畫罪」として扱われた⁷。2003年、〈台北市漫畫及人體圖片出版品租售管理自治條例草案〉が公表された。その年にも「制限級を越える」本についての論争があった。その後、新聞局では〈児童及少年福利法〉に基づき2004年12月1日に実施される予定だった〈出版品及錄影帶分級辦法〉が、更なる論争を引き起こした。

漫画を発展させるには、単に産業や漫画の経済利益から見るだけではいけない。政府に頼るのではなく、その社会的な基盤を探究する必要があるのだ。それによって、漫画は単なる一時的なものとしてではなく、ブームを引き起こしてからもすぐに消えずに継続していける可能性はある。

(2) 漫画は「文化」と「社会」としての制限と可能性

台湾では、多くの評論者が漫画発展に関する問題について、それは「切迫的な」問題だと言ってきた。だが、本論文では、漫画の発展に対して、急ぐばかりではいけないことが数多くあることを主張したい。地道に一步一步進んでゆくことが、本当の進むべき方法だ。なぜならば、漫画の発展は一つの文化の発展だからである。それには社会的な基盤が必要だ。これは長い時間をかけて見守り、労力を割くことが必要となる問題だ。これを考えずに進めると、問題は繰り返すだけだ。

全体をまとめれば、台湾漫画を制限する要因には以下の六つがある：一、政治力の介入。二、文化伝統による創作への抑圧。三、経済ロジックの躍起。四、読者の軽視。五、生活と文化から漫画を考える視点の欠落。六、「外来」(日本)漫画への認識不足により、日本マンガは台湾漫画の啓蒙者である制限者であるという二面性が見逃されていること。六つのポイントは全部長らく「文化と社会」の面で積み重ねられてきた問題で、特定で短期における事件は一つもない。

本論文が言及した文化と社会の問題によって、漫画は社会と対話する必要があることを指摘した。さもなければ、漫画への抑圧はまた起こる可能性は大きい。しかも、短い産業ブームと流行しかなく、その抑圧を克服し乗り越えられないままになるだろう。

整体史の観点から見ることで、台湾漫画における政治権力とイデオロギーの痕跡が明らかになった。そして、そこでは文化と生活の力が非常に弱かったことも。台湾漫画にとって、政治は主導する力、経済は今日、強化されていることである。文化は長期に抑圧されたままだ。この状況では、漫画を社会と対話させるのは非常に難しいのだ。

漫画業界には確かに様々な問題があって、解決する必要があるのは否定できない。だが、その中には漫画業界だけの問題ではないものもいくつもある。しかし、私達が見てきた解決方法はほとんど漫画業界が対象となっている。力を分散しないように協力しようという呼び声がよく聞けるが、「協力する基盤」はどこにあるのかを聞く人は減多にいないの。それこそが未来を見ていない証明だ。

産業には時間制限があって深刻そうな問題に手を出すことは理解しているが、今日まで続く文化問題に比べると、確かに産業問題には分かりやすく、問題点と解決方法も見つけやすいのだ(たとえば、作者には何が必要なのか、出版社は何が必要なのかとか)。作者と産業に関する論考はそれらの重要性をもっているが、その背後には「台湾漫画文化発展」=「台湾漫画産業発展」という前提がみえるのだ。この前提こそが漫画が台湾での発展に立ちはだかる制限を認識できない原因である。

漫画が発展する可能性は社会が様々な面から漫画に対する制限について理解してから成り立つものだ。そうした理解があってはじめて、この制限を突破することも考えられる。私達がやるべき仕事は長きに続く建設であって、単に事件やブームに載せられるだけではいけない。漫画の広い海を如何に理解する

⁷ 民生報2001年3月27日A10版、聯合報2001年3月28日第20版。民生報2001年3月27日ページA10、聯合報2001年3月28日ページ20。

のか。それは決して、海岸で潮を見るだけで分かる問題ではない。潮はいつも私達の目を奪っているが、やはり海の流れと規律を理解する必要があるのだ。祭りに例えてみよう。私達が見ているのはいつも祭りで輝いたその瞬間だけ。だが、一時間の祭りでも、準備する時間は数日、数週、数月から数年までに至るのだ。私達が向き合うべきは、一時間のイベント結果ではなくて、その長い準備期間なのだ。

漫画史を読むことは、つまりは漫画が私達の社会に提出した質問に答えることなのだ。漫画史は私達の社会にどんな質問をしているのだろうか。

その質問は文化と芸術、政治と経済、子供と青少年、技術と産業などなどに関する問いが含まれていて、そしてこれらの問いが互いに影響しあっている。

私たちにとって肝心なのは、漫画文化は如何なるのか、そして漫画文化はどうやって取り入れてもらえるのかということだ。本論文は台湾漫画にはチャンスはないとは思わない。だが、その制限と構造を知ってから、物事を考えることで、その実践の可能性をはじめて持てるのだ。しかし、本論文もただ「文化決定論」の観点を抱えているわけではない。文化は生活からなるものだ。ならば、それを変える可能性も生活にあるのだ。台湾に「漫画文化」があると宣言したいのなら、それは単に様々な漫画が私達の社会にあることではない。漫画には必ずしも品が必要であるとか、芸術になるべきだとは言わない。肝心なのは、漫画が好きな人がいて、その人が漫画作者になった。あるいは、漫画を一生の中で大切な部分とみなしていること。そして、彼（彼女）の成長とともに、漫画はずっとそばに置かれていたこと。それによって、漫画で感じたもの、学んだ知識や物事を日常生活で実践することだ。つまり、漫画文化にはテキストとその創作生産があって、読むことと消費することも含まれる。社会の再現と建造もある。時間の積み上げも。漫画作品に専念でき、漫画作品を深く語れ、解釈でき、個々人の命で作品と対話できたら、漫画を読み、理解することは、決して生きることから逃れることではない。それは自我と生活世界への認識だ。そして、私達の存在と体験を引き起こすものだ。漫画が私達の日常生活の重要な一部分である可能性もあるのだ。

参考文献（中国語）

- 李闡 1997 <早期台灣漫畫發展概況>，《文訊》97：26-28。
- 李闡 1998 《漫畫美學》，台北：群流出版社。
- 辛廣偉 2000 《台灣出版史》，石家莊：河北人民出版社。
- 洪德麟 1998 <台灣漫畫五十年經緯>，《歷史月刊》129：24-31。
- 洪德麟 1999 《風城漫畫50年》，新竹：竹市文化。
- 洪德麟 2000 <圖像世紀前台灣漫畫史的回顧與展望>，收入《台灣漫畫史特展》，頁21-26。台北：國立歷史博物館。
- 洪德麟 2003 《台灣漫畫閱覽》，台北：玉山社。
- 陳仲偉 2006 《台灣漫畫文化史—從文化史的角度看台灣漫畫的興衰》，台北：杜葳文化。
- 陳仲偉 2008 《台灣漫畫年鑑—對漫畫文化發展的另一種思考》，台北：杜葳文化。
- 蕭湘文 2000 <漫畫—流行的社會意義>，收入《台灣漫畫史特展》，頁10-14。台北：國立歷史博物館。
- 館林見晴 2005a <從新人獎看漫畫 第一回新人獎的二十年>，《挑戰者》12：160-163。
- 館林見晴 2005b <從新人獎看漫畫 第二回小咪漫畫的時代（一九八〇～一九八三）>，《挑戰者》13：168-175。
- 館林見晴 2005c <從新人獎看漫畫 第三回全國漫畫大擂台（一九八四～一九八六）前篇>，《挑戰者》14：186-189。
- 館林見晴 2005d <從新人獎看漫畫 第四回全國漫畫大擂台（一九八四～一九八六）後篇>，《挑戰者》15：150-155。

館林見晴 2005e <從新人獎看漫畫 第五回興盛期的東立新人獎（一九九一～一九九六）前篇>，《挑戰者》16：172-175。

館林見晴 2005f <從新人獎看漫畫 第六回興盛期的東立新人獎（一九九一～一九九六）後篇>，《挑戰者》17：178-181。

館林見晴 2005g <從新人獎看漫畫 第七回興盛期的大然新人獎（一九九三～一九九六）前篇>，《挑戰者》18：180-183。

館林見晴 2005h <從新人獎看漫畫 第八回興盛期的大然新人獎（一九九三～一九九六）後篇>，《挑戰者》19：154-157。

蘇清霖 1999 <1998 漫畫書市場概況 衝擊·失序·大考驗>，《出版情報》129、130 合併號：128-129。

Sulpia 2001 <圖書分級制度開跑，政府民間各唱各調>，收入《動漫 2001》，頁 227-229。台北：藍鯨。